

論文番号 19

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

The effects of wine and tobacco consumption on cognitive performance in the elderly: longitudinal study of relative risk

高齢者におけるワイン飲酒と喫煙習慣が認知低下に及ぼす影響：長期縦断研究から
執筆者

Leibovici D., Ritchie k., Ledesert B., Touchon J.

掲載誌 (番号又は発行年月日)

International Journal of Epidemiology 1999;28:77-81

キーワード

アルツハイマー病、喫煙習慣、アルコール、認知・記憶力、因子

要旨

背景

喫煙習慣や飲酒習慣は、老化に伴って顕れる衰えやアルツハイマー病に対して潜在的に予防的な関連があると言われているが、いまだ明確になっていない。そこで長期縦断研究で危険因子を明らかにしてみた。

方法

ワインや喫煙習慣と意識・認知の変化との間に関連があるか否かについて、正常な高齢者を対象に長期縦断研究で分析を行った。正常な高齢者かどうかについては、認知に関する広範囲な質問項目を使用して行った。

結果

白ワインを中程度飲む習慣のある群では、アルツハイマー病への危険が約4倍低いことが明らかになった (オッズ比: 0.26)。この結果は、他の因子を考慮して危険度がなくなったという他の研究からも裏付けられるものであった。ワインを飲む習慣は、長い年月の間に初期の認知低下や記憶力衰退危険因子を増加させる働きがみられた。喫煙習慣はアルツハイマー病を発症させる予防的な因子として働かなかったが、同時に喫煙習慣は長い年月の間に記憶力の衰えを減少させる働きがみられた。たとえ、ワインの飲酒習慣を調整した後、喫煙習慣は言語運用の衰えが増加するという知見が出たとしても、喫煙習慣と飲酒習慣が交ざったときの影響はみられなかった。

まとめ

ワインの飲酒習慣と喫煙習慣がアルツハイマー病に予防的に働くという仮説は立証できなかった。